

### 自然と共に生きる人の営みを守りたい

多くの生き物がすむ森は、周辺に生きる人たちの生活とも深くつながっている。特に、農業を営む人たちにとって、森や自然との共生は重要な課題となっている。南雲孝雄さんは、世界の森を守り、農村を幸せにするために奔走している。

#### 米どころで過ごした少年時代 農村の在り方に興味持つ

新潟県に生まれ育った私は、小さいころからコメ農家だった祖父の田んぼで遊び、水生生物や気象などの自然や環境に興味を持ちました。当時から、毎年積雪量や水生生物が減っている実感があり、小学生のころ、将来は環境問題に取り組みたいと思っていました。大学では地理学・地誌学を専攻し、茨城県の農業政策と、それに伴う土地利用の変化を研究しました。

大学院では文化生態学を専攻し、長野県大鹿村の農村振興をテーマにフィールドワークを行いました。人口約1000人、足の便が悪い小さな村ですが、農家民宿が10軒ほどあり、都市部から多くの観光客を集めています。村で生活してみると、農産物を無理に出荷せず、民宿業で消費する、複合的な農家経営に気がきました。

世界に興味を持ち始めたのは、学生時代にベトナムに旅行し、農村の貧困を目にしたから。世界の農村の生活を改善し、人々の幸せな暮らしを実現するための仕事をしたいと思ったとき、JICAに出会いました。

#### 企業・行政・国際機関が協力し 森を守るインセンティブを

JICAでは研修後、札幌国際センター(当時)に配属され、農業や環境分野の研修

を担当しました。農産物のブランド化など、地元の強みを生かした研修を計画する一方、海外のことを知らない農協や農家に研修受け入れを直接交渉するなど工夫しました。次に地球環境部に移り、イランのアンザリ湿原環境管理プロジェクトや、中南米地域の流域管理事業を手掛けました。

初めての在外事務所は、新人研修でお世話になったマレーシア事務所です。ボルネオ生物多様性・生態系保全プログラムでプロジェクト管理と新規案件の立ち上げを手掛け、JICA専門家や現地の上さまさまな関係機関と協力しました。在任中に東日本大震災が発生し、地元関係者から励ましの言葉や寄付を受け取り、日本に対する信頼を感じました。その後、調達部を経て再び地球環境部へ。開発途上国と先進国が協力して途上国の森を守る「REDD+」の、アジア諸国での取り組みを担当しています。

アジアには森を守る下地がありますが、焼畑や火災、違法伐採などが原因で森は減りつつあります。REDD+が提供する「森を守る」ことへのインセンティブを含めて、環境にやさしく持続的なグリーンエコノミーをどう実現していくかが課題です。また、日本の政府開発援助だけでは限界があるため、日本企業や他ドナーとの協力体制を構築していく必要があります。

アジアでのREDD+の特長は、日本企業



地球環境部  
森林・自然環境グループ  
自然環境第一チーム

**南雲 孝雄**  
NAGUMO Takao

大学院で環境政策を学び、卒業後、JICAに入構。北海道国際センター(札幌)、マレーシア事務所、調達部などを経て、2015年より現職。



インドネシアのREDD+プロジェクトに協力している県森林局長を表敬訪問

アイデアを持つ企業と協力し、オールジャパンによる取り組みを進めています。

一方、国によって中央と地方行政の関係が異なるため、その中でREDD+実施体制を構築するのは単純な作業ではありません。人の社会の複雑さと、突如災害を起す自然を相手にする難しさ、両者をにらみながらプロジェクトを進めるのは簡単ではありませんが、やりがいのある仕事です。

これからも、環境や農業分野の仕事に積極的に関わっていくつもりです。特に、日本の長所や取り組みをきちんと海外に発信し、国際的なルール作りに早い段階からしっかりと参加していきたいと思っています。



マレーシアの造林地を視察した南雲さん(右から二番目)